

医薬食品局が医療機関から報告を受けて保有していた症例のうち、特定製剤以外の血漿分画製剤投与例での肝機能検査値上昇等が認められた7症例

No.	製剤の名称	原疾患	使用目的	初回投与日	最終投与日	症状発現日	肝炎ウイルス検査の結果	輸血用血液製剤の有無	肝炎の種類・関連症状	厚労省への報告(報告日)	備考
1	ヴェノグロブリン-I(ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン)	不明熱(リウマチ様関節炎)		1984/4/27	1984/4/29	1984/5/25	無し	無し	黄疸	1989/7/19	1984/4/27～1984/5/5までセフォペラジン投与。医師はセフォペラジンによる薬剤性肝炎と診断しており、4月下旬の入院原因である発熱に対し、5/12より、ステロイド治療開始を行ったため、5月17日軽度肝機能異常、5月25日黄疸症状発生まで、肝機能悪化が遷延したと思われるとしている。また、薬剤性肝炎に対しても、ステロイドにより、その後軽快とされている。
2	ヴェノグロブリン-I(ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン)	水痘		1986/2/26	1986/2/27	1986/2/27	無し	無し	GOT,GPT上昇	1986/3/24	ネフローゼに対し、プレドニン使用中、水痘に罹患したため、ゾビラックスとヴェノグロブリン-Iを使用。報告医はゾビラックス使用回数増に従い、全身倦怠感、食欲不振増強し、GOT943,GPT903まで上昇したため、ゾビラックス4回投与で中止、以後、肝機能異常値は低下し、3週後に正常化。水痘も治癒。
3	献血ヴェノグロブリン-IH(ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン)	川崎病		2003/6/21	2003/6/22	2003/7/4	無し	無し	肝機能障害	2003/9/25	川崎病のため、大量免疫グロブリン療法施行により、発疹、発熱、肝機能障害、白血球、血小板減少を生じた例。
4	ヴェノグロブリン-IH(ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン)	川崎病		2004/2/9	2004/2/12	2004/2/12	無し	無し	肝障害	2004/2/19	川崎病、感染症疑いのため、ヴェノグロブリン-IH、モダシン、フロベンを2/9より投与開始。2/12に血液検査にてトランスアミナーゼ上昇等認めるも、2/18に軽快。
5	献血ベニロン-I(乾燥スルホ化人免疫グロブリン)	ギランバレー症候群		2004/5/18	2004/5/22	2004/5/25	無し	無し	肝機能障害	2004/6/9	ギランバレー症候群に対し、献血ベニロン-I 5/18から5/22に使用。5/25にAST,ALTの軽度高値観察、急性胃炎に対し、ガスター、ムコスタ投与開始。その後さらにAST、ALTの高値認めるも、6月上旬には軽快。
6	献血ベニロン-I(乾燥スルホ化人免疫グロブリン)	多発性硬化症		2004/12/7	2004/12/7	2004/12/14	無し	無し	肝機能障害	2005/1/28	12/14肝機能障害、強ミノCを一時使用も1/28まで肝機能障害持続
7	献血グロベニン-I-ニチヤク(乾燥ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン)	低ガンマグロブリン血症 慢性リンパ性白血病 サイトメガロ肝炎		2005/10/29	2006/1/19	2006/5/29	HBs抗原陽性	有り	高度黄疸、肝機能異常	2006/6/29	報告者により、2006/2の輸血、慢性リンパ性白血病治療に対するフルダラピン、プレドニゾン投与による過去のHBV感染の再燃可能性の指摘も有る。